



Title	画家ニルス・ダルデル：バイオグラフィー紹介と作品タイトルの日本語訳提案
Author(s)	梅谷, 綾
Citation	IDUN -北欧研究-. 2017, 22, p. 165-174
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/60754">https://doi.org/10.18910/60754</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 画家ニルス・ダルデル

### —バイオグラフィー紹介と作品タイトルの日本語訳提案—

梅谷 綾

#### 1. はじめに

ニルス・ダルデル (Nils Dardel, 1888-1943) はスウェーデンを代表する近代画家のひとりである。彼については残念ながら日本ではまだほとんど知られていないが、ストックホルム近代美術館を訪れたことがある人は彼の代表作である《ダンディの死》 (*Den döende danyn*)<sup>1</sup>を、グンナル・アスプルンド<sup>2</sup>が設計したことで有名なストックホルム市立図書館を訪れたことがある人は児童書部門の読み聞かせ部屋に描かれた壁画《ヨーン・ブルンド》 (*Jon Blund*)<sup>3</sup>を目にしたことがあるかもしれない。

ダルデルは、美術品収集家でありスウェーデン・バレエ団を主宰したロルフ・ドゥ・マレー<sup>4</sup>と長年にわたり深い交流があり、1917年に2人で世界を旅した際に日本を訪れた。そこでダルデルは日本美術に非常に高い関心を示し、この日本滞在以降の彼の作品には日本画の影響が強くなる。それ故にダルデルは今後、日本とスウェーデンの文化交流を考察する際に注目される人物だと思われる。本稿ではこれまでに筆者が日本語に訳したダルデル関連のスウェーデン語文献<sup>5</sup>の中でも主に Granath (1988: 99-120) を参考として彼のバイオグラフィーを紹介するとともに、彼の作品タイトルの日本語訳を提案する。

#### 2. 誕生～ストックホルムでの大学時代

ニルス・ダルデルは 1888 年、スウェーデンのソーデルマンランド地方 (Södermanland) のベツナ (Bettna) に 3 人きょうだいの末っ子として生まれた。父親のフリッツ・アウグスト・フォン・ダルデル<sup>6</sup>は地主であり陸軍大尉であっ

<sup>1</sup> ダルデルの作品タイトルの日本語訳は全て筆者によるものである。

<sup>2</sup> グンナル・アスプルンド Gunnar Asplund (1885-1940)：スウェーデンの建築家。

<sup>3</sup> Jon Blund：眠りをもたらすとされる妖精。ドイツのザントマン (Sandmann) に相当。

<sup>4</sup> ロルフ・ドゥ・マレー Rolf de Maré (1888-1964)：スウェーデンの美術品収集家。スウェーデン・バレエ団の主宰者であり、ストックホルムにあるダンス博物館 (Dansmuseet) の創設者。

<sup>5</sup> 筆者はこれまでに Asplund (1957-1958: 93-95, 124-126, 129-143, 165-206), Dardel (1995: 61-64), Granath (1988: 99-120), Lindahl (1980: 68-70, 74-76) を日本語に訳した。訳文は全て未発表。筆者がこれらを訳すことになった経緯については本稿 10. おわりに を参照。

<sup>6</sup> フリッツ・アウグスト・フォン・ダルデル Fritz August von Dardel (1847-1931)

た。父方の祖父であるフリッツ・ルドヴィグ・フォン・ダルデル<sup>7</sup>はスイス出身で、カール15世<sup>8</sup>の側近であり王室のカリカチュアを専門とする画家として有名であった。ニルスが誕生した翌年、ダルデル家はヴェストマンランド (Västmanland) 地方のアルボーガ (Arboga) 郊外にある屋敷スヴァットヘッル (Svarthäll) に引っ越した。ニルスにとっては幼少期を過ごしたスヴァットヘッルとアルボーガの景色が子ども時代を象徴するものとなった。

1903年の秋にダルデル一家はウップサーラ (Uppsala) に引っ越した。ニルスが芸術への関心を深めていったのはこの頃で、1904年に初めて自画像を描いた。1905年にニルスは猩紅熱 (しょうこうねつ) にかかり、その後遺症で心疾患を患った。これが彼の生涯にわたって尾を引くこととなる。療養中に彼は読書や水彩画、そして詩を書くことに没頭した。

1908年に彼はスウェーデン王立美術大学 (Konsthögskolan) に進学する。しかし彼は保守的で昔ながらの手法を重んじる大学の授業から学べることは少ないと判断し、大学で過ごした時間は短かった。

### 3. パリ時代～ドゥ・マレー、ラーゲルクヴィストとの出会い

1910年の秋にダルデルは初めてパリに渡った。画家や美術品収集家、美術商などの社交場となっていたカフェで彼はマティス<sup>9</sup>の弟子など美術に携わるあらゆる国の人々と知り合い、美術についての議論を交わした。この後ダルデルはパリに住まいをもち、夏の間だけスウェーデンに帰省するという生活を数年間続けた。

1912年の春にダルデルはパリの北東に位置する小さな町サンリス (Senlis) を訪れた。そこで彼はパリの喧騒から距離を置き、誰にも邪魔されることなく絵を描く機会を得て、キュビズムの構図や色彩に影響を受けた作品を描いた。この年の春にダルデルはストックホルムでの展示会でデビューを果たすが、彼の作品に対する評価は冷ややかなものであった。

1912年の夏にダルデルはウップサーラでロルフ・ドゥ・マレーと出会った。彼らは同い年である上に家柄やスイスの家系<sup>10</sup>、美術への強い関心、性的指向<sup>11</sup>など共通点が多く、ドゥ・マレーはダルデルの良き理解者かつ経済的な支援者となった。

<sup>7</sup> フリッツ・ルドヴィグ・フォン・ダルデル Fritz Ludvig von Dardel (1817-1901)

<sup>8</sup> カール15世 Karl XV (1826-1872)：スウェーデンの国王。(在位：1859-1872)

<sup>9</sup> アンリ・マティス Henri Matisse (1869-1954)：フランスの画家。

<sup>10</sup> ドゥ・マレーの母はスイスの貴族フォン・ハルヴィール (von Hallwyl) 家の出身で、母方の祖母のヴィヘルミーナ・フォン・ハルヴィール (Wilhelmina von Hallwyl) はストックホルムにあるハルヴィール美術館 (Hallwylska museet) の創設者。

<sup>11</sup> ドゥ・マレーはホモセクシュアルであることを公にしていた (<http://www.dansmuseet.se/sv/om-dansmuseet/rolf-de-mare/>)。ダルデルもバイセクシュアルであり、ドゥ・マレーと関係をもっていた時期があった (<http://www.gp.se/n%C3%B6je/kultur/dardel-gjorde-livet-till-teater-1.480670>)。

1914年にスウェーデンに戻ったダルデルはストックホルムでパール・ラーゲルクヴィスト<sup>12</sup>と出会った。彼らは互いの作品を高く評価し、その後芸術家仲間として長年にわたり互いに影響を与え合う存在となった。

#### 4. 1917年の世界旅行と日本滞在

1917年1月1日、ダルデルはドゥ・マレーと共に旅に出た。彼らはまずアメリカ大陸に渡り、ニューヨークやフロリダ、キューバ、アリゾナ、メキシコ、カリフォルニアなどを巡った後にハワイを経由し、4月に日本に到着した。東京で二人は駐日スウェーデン公館を訪れた。当時の公使はグスタヴ・ヴァッレンバリ<sup>13</sup>であった。ダルデルたちは多忙な公使と顔を合わせることはほとんどなかったが、ヴァッレンバリ夫人と公使の21歳の娘ニータ<sup>14</sup>とは行動を共にするようになった。

ドゥ・マレーは同年5月14日に先に帰国の旅に出発したが、日本の美術と自然に強い感銘を受けたダルデルはもうしばらく日本に留まることにした。滞在中に日本美術を熱心に研究した結果として、帰国後以降の彼の作品には木版画の線の流れや日本画によく用いられる動物のモチーフなど様々な影響が見られる。

ダルデルはヴァッレンバリ夫人やニータに同行して北海道を旅行し、彼女たちが軽井沢のヴァッレンバリ家の別荘に行く際にも同行した。軽井沢滞在中、ダルデルは日本人画家に絹の布地に水彩画を描く技術を教わった<sup>15</sup>。

旅行などを通して仲を深めていったダルデルとニータは秘密裏に婚約した。ヴァッレンバリ夫人はダルデルのことを非常に気に入っており喜んだが、公使にはまだこの婚約のことは知らされていなかった。その後、ダルデルたちは日光にも滞在した。約半年にわたる日本滞在中の後、1917年10月にダルデルはヴァッレンバリ夫人とニータと共に日本を出発し、シベリア鉄道でスウェーデンに帰国した。

#### 5. 婚約破棄とトーラとの出会い

1918年、ダルデルはストックホルムにアトリエを借りて、日本で受けたインスピ

<sup>12</sup> パール・ラーゲルクヴィスト Pär Lagerkvist (1891-1974)：スウェーデンの作家。1951年ノーベル文学賞受賞。

<sup>13</sup> グスタヴ・ヴァッレンバリ Gustaf Wallenberg (1863-1937)：スウェーデンの外交官。Wallenberg はスウェーデン有数の資産家の一族である。Wallenberg のカタカナ表記については「ワレンバーグ」、「ヴァレンベリ」などのバリエーションが存在するが、本稿ではスウェーデン語の本来の発音に最も近い「ヴァッレンバリ」を採用する。

<sup>14</sup> ニータ・ヴァッレンバリ Nita Wallenberg (1896-1966)：グスタヴ・ヴァッレンバリの娘。ダルデルはニータの肖像画を複数描いた。

<sup>15</sup> ダルデルが日本人画家に日本画を教わる姿を写した写真が Dardel (1995: 65) に掲載されているが、撮影地は東京となっている。また、この日本人画家が誰であるかは不明。



レーションを作品にすることに専念した。同年4月には自身初となる個展をストックホルムで開いた。ダルデルはこの個展で注目を浴び、評論家たちを驚かせた。彼はさらにこの年、彼の代表作である《ダンディの死》や《シベリア鉄道》(*Transsibiriska expressen*)を描いた。ストックホルムでの個展成功が功を奏し、ダルデルはこの年の11月にユータポリ(Göteborg)でも個展を行い、ニータもこれを手伝った。

1919年、ダルデルはニータの父親であるグスタヴ・ヴァッレンバリにより婚約破棄を言い渡される。《処刑》(*Exekution*)や《無慈悲》(*Utan Pardon*)、《階段》(*Trappan*)、《死の軽騎兵》(*Dödens Husarer*)はこの時期の彼の絶望と憂鬱で揺れる心の内が描かれた作品である。

その翌年に彼はユータポリからパリへ向かい、その旅路で彫刻の勉強をするためにパリに向かうトーラ・クリンコヴストゥルム<sup>16</sup>と出会った。ダルデルはパリで家を探し、ルビック通り108番地<sup>17</sup>のアトリエを見つけた。ダルデルとトーラの距離は次第に縮まっていき、いつしかトーラはダルデルのアトリエで一緒に暮らすようになった。

## 6. スウェーデン・バレエ団とトーラとの結婚

1920年、ロルフ・ドゥ・マレーはパリでスウェーデン・バレエ団<sup>18</sup>を創設した。このバレエ団は、ダンスや音楽、美術といった様々な分野の芸術家が集結した芸術集団であった。シャーン・グリーン<sup>19</sup>が振付師兼ダンサーを務め、作曲にはクロード・ドビュッシー<sup>20</sup>やエリック・サティ<sup>21</sup>らが参加し、美術・衣装にはジョルジオ・デ・キリコ<sup>22</sup>やフェルナン・レジェ<sup>23</sup>、そしてダルデルなどが参加した。ダルデルは『夏至の前夜祭』(*Midsommarvaka*)と、ラーゲルクヴィストの戯曲『天国の秘密』(*Himlens hemlighet*)が基となった作品『精神病院』(*Dårhuset*)で美術と衣装を担当し、『エル・グレコ』(*El Greco*)では衣装を担当した。また彼は、パリのモダニズム画家たちとバレエ団との仲介役や、その後大きな影響力をもつジャン・コクトー<sup>24</sup>と彼の仲間たちとバレエ団との仲介役も果たした。活

---

<sup>16</sup> トーラ・クリンコヴストゥルム Thora Klinckowström (1899-1995)：スウェーデンの作家。1921年から1934年までダルデルと結婚していた。

<sup>17</sup> ルビック通り Rue Lepic：パリのモンマルトルにある通り。

<sup>18</sup> バレエ・スエドワとも。

<sup>19</sup> シャーン・グリーン Jean Börlin (1893-1930)：スウェーデンの振付師・バレエダンサー。

<sup>20</sup> クロード・ドビュッシー Claude Debussy (1862-1918)：フランスの作曲家。

<sup>21</sup> エリック・サティ Erik Satie (1866-1925)：フランスの作曲者。

<sup>22</sup> ジョルジオ・デ・キリコ Giorgio de Chirico (1888-1978)：イタリアの画家。

<sup>23</sup> フェルナン・レジェ Fernand Léger (1881-1955)：フランスの画家。

<sup>24</sup> ジャン・コクトー Jean Cocteau (1889-1963)：フランスの芸術家で詩人・小説家。

動期間がわずか5年と短命だったスウェーデン・バレエ団だが、セルゲイ・ディアギレフ<sup>25</sup>が率いたロシア・バレエ団<sup>26</sup>にとっては強力なライバルであった。

1921年、ダルデルは風邪をこじらせて肺炎を患い、昔からの心疾患が原因で病状は深刻になった。ダルデルは数週間にわたり生死の間をさまよい、トーラは彼を看病し続けた。そして同年7月23日、ダルデルはパリでトーラと結婚し、翌年には娘のイングリッド<sup>27</sup>が誕生した。結婚し父親になったことでダルデルの作風に変化が見られ、残酷で暴力的な描写は減っていった。

## 7. 肖像画家としての活躍と《ヨーン・ブルンド》

1923年の秋、何か新しいことをしたいと考えたダルデルは、人物のデッサンを描き始めた。1925年頃から徐々に彼の作品に占める肖像画の割合は増えていった。

1927年、人気の肖像画家となったダルデルはストックホルムで上流階級の女性の肖像画を多く描くようになった。この頃から妻のトーラとの距離は次第に離れていき、同年の夏にトーラはひとりでパリに戻った。ダルデルはグンナル・アスブルンドが設計した新しいストックホルム市立図書館の子どものための読み聞かせ部屋の装飾という、いつもとは違った仕事の依頼を受けていたためストックホルムに留まった。彼はその部屋の壁面に《ヨーン・ブルンド》を描いた。これは湿度の高い環境での骨の折れる作業であり、11月にパリに戻った時、彼は両側性肺炎と診断された。今回は前回の病気と比べかなり深刻であり、彼は手術のため病院に運ばれた。療養のため湿度の低い環境を求めて、ダルデルはトーラと共にアフリカのチュニジアを訪れた。彼はアフリカの熱気の中で回復し、質素だがユニークな民族と出会い、彼らをスケッチすることで絵を描く意欲を取り戻した。

## 8. 不況の影響とアメリカ大陸での晩年

1930年代のはじめには世界恐慌が芸術市場にも大きな影響を及ぼし、ダルデルへの肖像画の依頼は激減した。ダルデルはこの頃、エディタ・モリス<sup>28</sup>と出会った。彼の新たな恋心は《燃えるハート》(*Ett hjärta i brand*)に描かれた。エディタはこの後ダルデルが亡くなるまで彼と共に旅することとなる。

不況の波紋が広がる中、ルピック通りの家賃が上がったためダルデルは1932年6月に12年間暮らしたアトリエを離れざるを得なくなった。トーラは娘のイング

<sup>25</sup> セルゲイ・ディアギレフ Sergei Diaghilev (1872-1929)：ロシアの舞台美術家でロシア・バレエ団の創設者。

<sup>26</sup> バレエ・リュスとも。

<sup>27</sup> イングリッド・エークヴァル Ingrid Ekwall (1922-1962)：ダルデルとトーラの娘。Ekwallはイングリッドの再婚相手の姓。

<sup>28</sup> エディタ・モリス Edita Morris (1902-1988)：スウェーデン系アメリカ人作家。

リッドをつれてスウェーデンに帰国し、ダルデルはモンパルナスに小さなアトリエを借りた。この年の秋にダルデルとトーラの離婚は決定的になった。

1933年、ダルデルは自身の心疾患を意識しながら生活を送り、その死への意識が《死の召使い》（*Dödens domestiker*）などの作品に反映された。1934年にはダルデルとトーラの離婚が成立した。この年、彼はスウェーデン王立芸術アカデミー（Konstakademien）の会員となった。

1936年にダルデルはエディタと共に再び旅に出て、イタリアやチュニジア、アルジェリアを訪れて現地の人々を絵に描いた。50歳の誕生日を迎えた1938年10月に彼は自身初の回顧展をユーテボリで開いた。この個展では1913年から1938年の25年の間に描かれた141点の作品が展示された。1939年の春にはルンド（Lund）でも回顧展が開かれた。同年9月にはストックホルムのリリエヴァルク美術館（Liljevalchs konsthall）でダルデル作品400点を展示した大規模な展覧会が開かれた。この展覧会は大成功し、評論家たちは満場一致で彼の作品を認めた。これがダルデルの生前最後のスウェーデンでの展覧会となった。この年の11月にダルデルはストックホルムを離れ、エディタと共にニューヨークへ渡った。その後ダルデルはニューヨークを拠点としてエディタと中南米を旅しながら作品を描き続けた。1943年5月3日から22日までアメリカ大陸を巡って描いた作品の展示会を開いたダルデルは、翌日5月23日にニューヨークで心臓発作のため54歳で亡くなった。

## 9. ダルデルの作品名の日本語訳提案

本章ではダルデルの作品タイトルの日本語訳を提案する。なお、ここに挙げるのはダルデルの作品の一部である。

年	原題	日本語訳提案
1904	<i>Självporträtt</i>	《自画像》
1909	<i>Torparflicka</i>	《小作人の娘》
1910	<i>Filip Fromén</i>	《フィリップ・フロメーンの肖像》
1911	<i>Min far</i>	《父》
1912	<i>Flickan med järnklotet</i>	《鉄球を持つ少女》
1912	<i>Nybroviken</i>	《ニーブローヴィーケンの風景》
1912	<i>Båtar, Nybrohamnen</i>	《ニーブローナムネンの船》
1912	<i>Flickan i fönstret</i>	《窓辺の少女》
1913	<i>Alfred Flechtheim</i>	《アルフレッド・フレヒトハイムの肖像》
1913	<i>Eglise Saint Jean i Senlis</i>	《サンリスのサン・ジャン教会》

1913	<i>Begravning i Senlis</i>	《サンリスの葬儀》
1914	<i>Ulla Bjerne</i>	《ウッラ・ビャーネの肖像》
1914	<i>Stad i Tunisien</i>	《チュニジアの町》
1914	<i>Reception</i>	《レセプション》
1915	<i>Ellen Roosval</i>	《エッレン・ロースヴァルの肖像》
1915	<i>Eté en Suède</i>	《スウェーデンの夏》
1915	<i>Turisthotellet i Rättvik</i>	《レットヴィークの観光ホテル》
1916	<i>Turisten på Teneriffa</i>	《テネリフェ島の観光客》
1916	<i>Rolf de Maré</i>	《ロルフ・ドゥ・マレーの肖像》
1916	<i>Frälsningsarmén</i>	《救世軍》
1916	<i>Hamn vid Atlantiska Oceanen</i>	《大西洋の港》
1916	<i>Pajazzo</i>	《道化師》
1916	<i>I skyttegraven</i>	《塹壕（ざんごう）》
1917	<i>Tvetydigt sällskap</i>	《怪しい集団》
1917	<i>Hjorten</i>	《鹿》
1917	<i>Japanska</i>	《日本の女性》
1917	<i>Den sönderslagna statyn</i>	《破壊された石像》
1917	<i>Tågresa till Hokkaido</i>	《北海道への列車の旅》
1918	<i>Mannen från Uri</i>	《ウーリの男》
1918	<i>Exotiskt landskap</i>	《エキゾチックな風景》
1918	<i>Bajadärer</i>	《バヤデルたち（インドの舞姫たち）》
1918	<i>Påfåglar</i>	《孔雀》
1918	<i>Toalettscen</i>	《化粧室》
1918	<i>Transsibiriska expressen</i>	《シベリア鉄道》
1918	<i>Den döende dandyn</i>	《ダンディの死》
1918	<i>Nybroplan</i>	《ニーブロープランの風景》
1918	<i>Nils vilar sig</i>	《ニルスの休息》
1918	<i>Dam i gröna pyjamas mördande herre i svarta</i>	《黒いパジャマの紳士を殺す緑のパジャマの婦人》
1918	<i>Flickan och krymplingen</i>	《少女と廃人》
1918	<i>Eleganter i Japan</i>	《日本の気品》
1918	<i>Jägaren och den förryckta flickan</i>	《猟師と気の狂った少女》
1919	<i>Indian och buffel</i>	《インディアンとバッファロー》
1919	<i>Trappan</i>	《階段》

1919	<i>Gulliver</i>	《ガリバー》
1919	<i>Jean Börclin i siamesisk dans</i>	《シャーン・ブリーンのシャムの踊り》
1919	<i>Exekution</i>	《処刑》
1919	<i>Ynglingen och flickan</i>	《青年と少女》
1919	<i>Prinsessa</i>	《プリンセス》
1919	<i>Eremiten</i>	《世捨て人》
1919	<i>Den diskrete gossen</i>	《寡黙な青年》
1919	<i>Yngling i svart, flicka i vitt</i>	《黒い服の青年と白い服の少女》
1919	<i>Dödens husarer</i>	《死の軽騎兵》
1919	<i>Flickan och påfågeln</i>	《少女と孔雀》
1919	<i>Den trevliga sommarsöndagen</i>	《素敵に夏の日曜日》
1919	<i>Den drunknade flickan</i>	《溺死した少女》
1919	<i>Utan pardon</i>	《無慈悲》
1920	<i>Svenska balettens triumf</i>	《スウェーデン・バレエ団の勝利》
1920	<i>Baren</i>	《バー》
1920	<i>Dödsdansen</i>	《死のダンス》
1921	<i>Vattenfall</i>	《滝》
1921	<i>Crime Passionnel</i>	《痴情沙汰》
1921	<i>Visit hos excentrisk dam</i>	《風変わりな婦人を訪ねて》
1922	<i>Dansbanan</i>	《ダンスフロア》
1922	<i>Drömmar och fantasier</i>	《夢と空想》
1922	<i>Herden och råttorna</i>	《羊飼いとネズミ》
1923	<i>Min dotter</i>	《我が娘》
1924	<i>Columbi ägg</i>	《コロンブスの卵》
1924	<i>Hjalmar Bergman</i>	《ヤルマル・バリマンの肖像》
1924	<i>Svarta Diana</i>	《黒人のディアナ》
1927	<i>Jon Blund</i>	《ヨン・ブルンド》
1929	<i>Oxögat</i>	《オクルス》
1930	<i>Irländskan</i>	《アイルランドの女性》
1930	<i>Den nya rutan</i>	《新しい窓》
1931	<i>Wedding Trip</i>	《新婚旅行》
1931	<i>Ett hjärta i brand</i>	《燃えるハート》
1933	<i>Dödens domestiker</i>	《死の召使い》
1934	<i>Fågelskrämman</i>	《かかし》

1934	<i>Den kuriöse gossen</i>	《奇妙な少年》
1936	<i>Edita Morris</i>	《エディタ・モリスの肖像》
1936	<i>I sålnedgången</i>	《夕暮れの中で》
1940-1943	<i>Skelett till häst</i>	《乗馬する骸骨》

## 10. おわりに

本稿ではスウェーデンを代表する近代画家ニルス・ダルデルの経歴について、筆者がこれまでに日本語に訳したダルデルに関するスウェーデン語文献<sup>29</sup>をもとに紹介した。なお、筆者の本来の専門はスウェーデン語学であり、ダルデル文献の日本語訳は京都工芸繊維大学文化遺産教育研究センター特任助教 上田文氏の課題研究〈平成 23 年～平成 25 年度 科学研究費補助金 基盤研究 (C) 研究課題「土田麥僊における人物画の解明と京都画壇における位置」(研究代表者:上田文, 課題番号 23520167)〉への研究協力によるものである(上田氏の肩書は当時)。本稿ではダルデルのバイオグラフィーを紹介し、彼の作品タイトルの日本語訳を提案するにとどまったが、筆者が訳した文献の中には彼の作品や日本滞在についての詳細など興味深い内容の記述があるため、そちらについても今後紹介していきたい。

---

<sup>29</sup> 筆者が訳した文献については本稿の脚注 5 を参照。

## Nils Dardel

### - Biografi och förslag på japanska översättningar av hans verks titlar -

#### Aya Umetani

#### Sammanfattning

Nils Dardel är en av Sveriges mest populära konstnärer, men är tyvärr inte känd här i Japan än. Han reste runt i världen 1917 tillsammans med sin goda vän konstsamlaren Rolf de Maré, och då reste de även till Japan. Dardel blev väldigt intresserad av japansk konst och studerade den noga under sin vistelse i Japan. I hans målningar efter resan kan man se hur han har inspirerats av den japanska konsten. Syftet med denna artikel är att presentera hans biografi (kapitel 2– 8), och att föreslå japanska översättningar av hans verks titlar (kapitel 9). Denna artikel är troligen den första på japanska som handlar huvudsakligen om honom, så jag hoppas att den kommer att vara till hjälp för dem som är intresserade av svensk konst genom att lära känna en av Sveriges mest älskade målare.

#### 参考文献

- Asplund, Karl. 1957-1958. *Nils Dardel I-II*. Stockholm: Sveriges Allmänna Konstförening.
- Dardel, Thora. 1995. *En bok om Nils Dardel*. Stockholm: Cordia.
- Granath, Olle. 1988. *Nils Dardel, 1888-1943: Moderna museet Stockholm*. Stockholm: Moderna museet.
- Hillman, Göran. 1993. *Vem är vem i svensk konst: från runristaren Balle till Ulf Rollof*. Stockholm: Rabén & Sjögren.
- Lindahl, Ingemar. 1980. *Visit hos excentrisk herre: en bok om Nils Dardel*. Stockholm: Bonnier.

#### インターネット上の資料

- Dansmuseet. <http://www.dansmuseet.se/>
- DigitaltMuseum. <https://digitaltmuseum.se/>
- Göteborg-Posten. ”Dardel gjorde livet till teater“.  
<http://www.gp.se/n%C3%B6je/kultur/dardel-gjorde-livet-till-teater-1.480670>
- Moderna museet i Stockholm. <http://www.modernamuseet.se/stockholm/sv/>
- Project Runeberg. <http://runeberg.org/>